日文教育資料

子どもが育つ　わたしが育つ

子どものABC

文・絵　阿部宏行

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ！ 日文 検索

子どもが育つ　わたしが育つ「子どものＡＢＣ」

■「子どもを育てる」ということ

育児は「育自」です。

親や先生には，自分のしていること，しようと思うことに「責任」が伴います。惑い，悩みながら結論を導き出さなければならないことがあります。子どもを育てるということは，子どもの成長を目の当たりにしながら「自分を育てること」なのです。

「子どもが見えない」「子どものことがわからない」いろいろな声が聞こえてきます。子どもが見えないという人は，子どもから自分が見えているのでしょうか。自分の一方的な見方，大人の都合で子どもを見てはいないでしょうか。子どものまなざしを感じながら，「子どもを育てる」ということをいっしょに考えてみませんか。

「子育てとは　目の前だけでなく　もっと遠い未来を見つめること」[1]です。

子どもへのいちばん大事な贈り物は支えてあげることです。

「私がここにいる，いつでも助けてあげる」という親や先生の姿勢です。

子どもを育てる出発点は子どもの言葉を聞くことからです。アメリカインディアンのことわざに「話を聞くときには，三度聞く必要がある」というのがあります。最初は聞く，次に聞くときには意味を理解する，その次には本当に相手の言いたいことを察して受け止めてあげるということです。

子育て以上に価値ある仕事はありません。[2]

この「子どものABC」は，おかあさん・おとうさんへ，先生へ，そして子どもを育てることにかかわるすべての大人へ届けたい「手紙」です。

あなたといっしょに子育て・自分育てのABCです。

1）ドロシー・ロー・ノルト著　吉田利子訳『いちばん大切なこと』PHP研究所　2005
2）佐々木正美『抱きしめよう，わが子のぜんぶ』大和出版　2006
＊）ロバート・ブラックウルフ・ジョーンズ　ジーナ・ジョーンズ著　加藤諦三訳『アメリカインディアン　聖なる言葉』大和書房　2008

もくじ

子どもが育つ　わたしが育つ

「子どものＡＢＣ」

はじめに：「思い」が子どもを育む …… 3

成長するということ

❶ 生きるということ …… 5
❷ 夢中になることの意味 …… 6
❸ 子どもも大人も同じ …… 7
❹ 時間の庭 …… 8
❺ 大人になって …… 9
❻ 待つ時間 …… 10
❼ 子どもの安心圏内 …… 11
❽ 何のために生きるのか …… 12
❾ 発達すること　学ぶこと …… 13

育てるということ

⓫ たかが子ども　されど子ども …… 15
⓫ 子どもをたたいてはいけません …… 16
⓬ どこで学ぶ　誰が教える？ …… 17
⓭ 子どもをよりよく育てたいのなら …… 18
⓮ ガミガミ・クドクド・ネチネチ …… 19
⓯ 過保護と過干渉 …… 20
⓰ 大人の基本的生活習慣と子ども …… 21
⓱ してほしいことを伝える …… 22
⓲ 子どもは「作品」？！ …… 23
⓳ 子どもは感じたことから学ぶ …… 24
⓴「しなさい」と「しようね」 …… 25
㉑ 間のない話　間抜けの話 …… 26
㉒「せっかく」「こんなに」「のに」 …… 27
㉓ 認めてほしい　ほめてほしい …… 28
㉔ 子育てに近道なし …… 29

ともに生きるということ

㉕ 成長は「背伸び」と「ジャンプ」 …… 31
㉖ おかげさま …… 32
㉗ 自らを成長させようとする力 …… 33
㉘「もの」より「こと」 …… 34
㉙ あたりまえのことをていねいに …… 35
㉚ 愛すること …… 36
㉛ 勝たない人生 …… 37
㉜ 子どもは未来 …… 38
㉝「託す」という命のバトンタッチ …… 39
㉞ ♪歌詞に込められた思い …… 40
㉟ 変えたいことが変わらない …… 41
㊱「雑育」にするもしないも …… 42
㊲ 今　微笑んでいますか？ …… 43
㊳ 本来あるべき姿を求めて …… 44
㊴ 忘れてはいけないこと …… 45

子どもの詩からみえること …… 46
平和の重み …… 47
あとがきにかえて …… 48

「思い」が子どもを育む

この世の中は「思い」で，できています。

動物園でも見る人の思いの違いによって，檻の中の動物に対して「ああ故郷の夢を見ながら草原を自由に走りたいと思っている」という見方もあれば，「食べるものを心配しないでいるから喜んでいる」という考えもあるでしょう。

しかし，おそらく動物は置かれた環境で生きる営みをしているだけなのです。その動物を見る人の「思い」が交錯して様々なイメージが生まれます。この思いは「想像」の産物なのです。

子育てを通して私たちは，お母さんのおなかの中ですくすくと育っていたあのころも，元気な赤ちゃんが生まれてほしいという思いに包まれていました。

入園や入学式の前夜の寝顔を見ながら，これまでの成長の喜びを感じるとともに，これからも健やかに育ってほしいという願いや思いが一層強くなっていったのではないでしょうか。

思いは「命」です。「命」を支えるのも「思い」です。私たち大人の役割は，この「命」を支えることです。自然の営みの中で永々と続く，この「命」を支える仕事（子育て）ほど，尊いものはありません。

子育ては700万年前から永々と続く人類の歴史そのものです。その子育てに正解などあるのでしょうか。

「人生にも，子育てにも，きっと正解なんてありません。いつも迷いながらだけど，その時その時でベストを尽くしている実感を信じてやっていくしかない。」[1] と，子育てを実感しながら現実を生きているのです。今を一生懸命生きることなのです。

「大自然は人の子を生むだけではありません。これを育てます。これがほんとうの教育です。人はその手助けをします。これを人は教育といっていますが，ほんとうは教育の手助けなのです。」[2]

私たちは，自然の大いなる力のもとで，様々な人やものの力を借りて，今を紡いでいるのです。

1）川上未映子　朝日新聞　2015.11.23「キミとどたばた」から
2）岡　潔　『情緒と創造』講談社　2002

成長するということ

子どもの詩

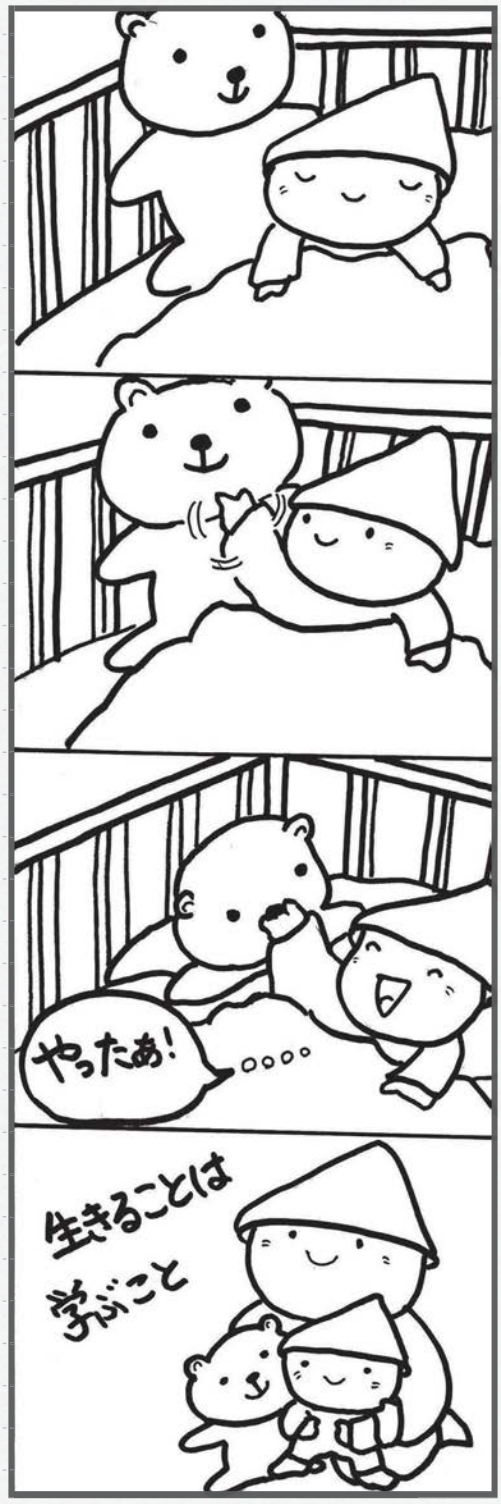
お父さんとお母さん

大渕　かおる（栃木・小五）

私はお母さんに
「お父さんすき。」
って聞くの。
お母さんは何にもてれずに、
顔もふつうに、
私の方を見て、言うの。
「すきだよ。」
って言うの。
お父さんも、ふとんにすわって、
「すきだよ。」
って言うの。
何にもてれずに、
顔もふつうに、
私の方を見て言うの。
にこにこして言うの。
そんな気安く決められないのにな。
すきだなんて。

吉野弘・新川和江監修『おかあさん、あのね　こどもがかいた
おかあさんの詩1』大和書房　1991

1 生きるということ



学ぶことと生きること

子育ては，常に現実を踏まえて行われますから，少し前のことやずっと前のことは忘れてしまいます。

大人になると，自分の子どもの時のことも，やはり忘れてしまいます。「忘れる」からこそ前に進めるのかもしれません。でも，大人になっていない子どもたちは，新しい自分を見つけようと今日も，自分で「自分」を学んでいます。

生きることは学ぶこと

子どもが生きるということは「学び」です。

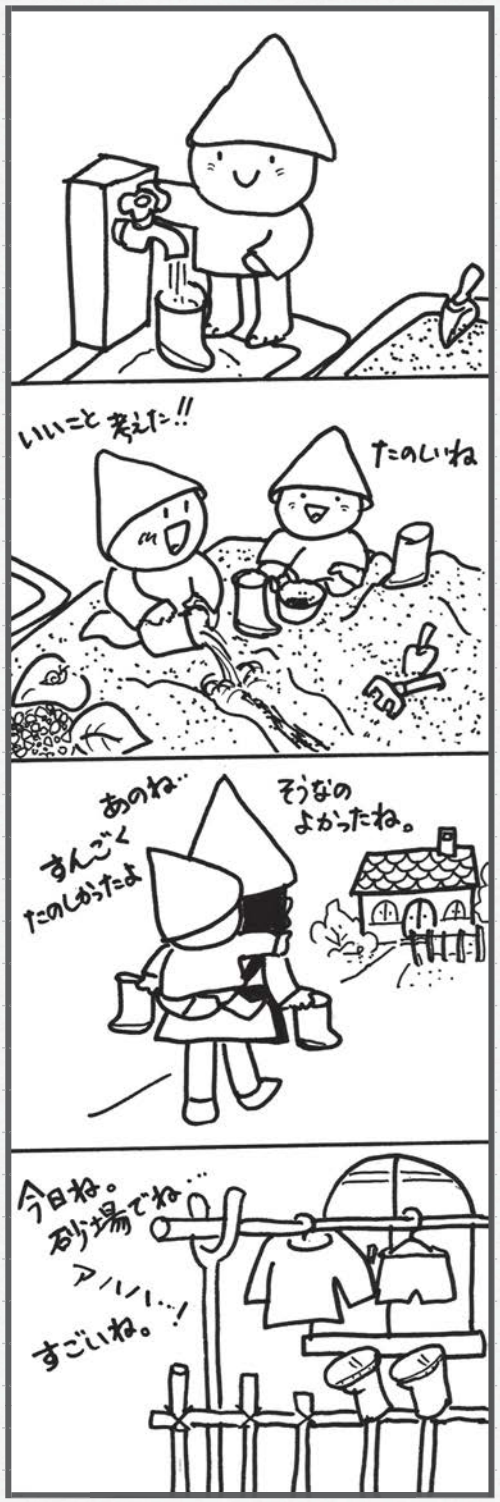
「生きるとは　手をのばすこと　幼子の　指がプーさんの　鼻をつかめり」*）という俵万智の短歌があります。ここには，31文字に込められた我が子への温かなまなざしがあります。これは，赤ちゃんの確かな成長の証なのです。枕元にあるプーさんのぬいぐるみの鼻を視覚でとらえ，鼻までの距離や方向を推定します。鼻に向かって手を伸ばすが，なかなかうまくつかめません。方向や指の開閉を修正し，そして，つかむのです。これは赤ちゃんにとっての「学び」であり，「喜び」でもあります。

「自己肯定感」の原点は，ここにあります。この成長を親や周囲の人が，温かく見つめ認めることで，一層高まりを生み出します。挑戦し，失敗しながらも，粘り強く試みて，ついには成功する「喜び」を感じ取ります。

そのときの子どもの思いは「命」です。これが成長であり，学びの獲得なのです。

*）俵　万智　『プーさんの鼻』文藝春秋　2005

2 夢中になることの意味



夢中になる

「こんなことでどうして子どもは喜ぶの？」と思うことがあります。例えば，水遊びや泥んこ遊びなどです。

水遊びを好むのは，産まれる前の母胎での記憶があるからなど諸説あります。子どもが夢中になる遊びには理由があります。夢中になることは成長に必要なこととして，秋田喜代美は「支える仲間がいる教室において居場所感があり安心できる環境で，学習内容に没頭できることで真の学びにつながる」[1] といっています。夢中になることでしか得られないことがあります。

子どもたちはどんな時に，どんなことに夢中になるでしょうか。子どもを見つめ，子どもから学ぶことです。

いちばん大切なこと

詩人のまど・みちおは，小学生にあてて「どんなちいさなことでも　ぜんりょくを　あげて　やる　しゅうかんを　つけるのが　いちばん　たいせつなのです。」[2]と手紙に書きました。

「小学生は　うまれてはじめての　がっこうで，たった　一かいきりの　すばらしい『とき』です。すっごい『とき』です。」と続けています。

学校や教室は，夢中になれるところです。全力で取り組むことができる場所でなくてはなりません。

「人間は必ず死にます。だからこそ限りある生に人それぞれが自分なりに意味を見出す必要がある。」[3] 今を精いっぱい生きることを子どもが教えてくれています。

＊1）秋田喜代美　『学びの心理学　授業をデザインする』左右社　2012
＊2）まど・みちお　『まどさんからの手紙　こどもたちへ』講談社　2014
＊3）ロバート・フルガム著　池　央耿訳　『人生に必要な知恵は　すべて幼稚園の　砂場で学んだ』河出書房新社　1990

3 子どもも大人も同じ

子どもは大人の半分ではない

子どもは一人では生きていけません。知識や経験も少ない存在です。

でも小さいだけで体もすべて大人と同じものが揃っています。たとえ身長が大人の半分でも人間が半分ではないのです。中身は同じ人間なのです。[1)]

ですから，子どもと向かい合う時は同等の関係です。同等の関係であることを忘れると「子どもだまし」という粗雑で，上から目線の態度となって表れるのです。親が子どもに与えることの最上の財産は愛情です。親にたっぷり愛情を与えられた子どもは大人になったとき，他人を信じるところから関係をつくろうとします。でも親の愛情に不安をもった子どもは他人を疑うところから関係をつくろうとします。

黙って手をつなぎ，抱きしめることで愛情を与えることができるのです。

「だっこ」っていいね

絵本作家のいもとようこの絵本「しゅくだい」では，めえこ先生が「今日の宿題は，だっこしてもらうこと」[2)] といいます。「はずかしいよぉ」「えー」などと言いながら，子どもたちは家に帰ります。さて……子どもたちは，どうしたのでしょう。

この宿題は，様々な家庭環境で生活している子どもたちには，難しい宿題かもしれません。でも，子どもたちが，少し照れながらも，うれしそうに「だっこ」される情景が目に浮かびます。ここに大事なものがあるような気がします。

私から皆さんへの，今日の宿題は子どもをだっこすることです。

＊1）きむら　ゆういち　『子ども，あなどるべからず』岩波ブックレット728　2008
＊2）宗正美子原案　いもと　ようこ文・絵　『しゅくだい』岩崎書店　2003

4 時間の庭

時間の庭に咲く花

人間は皆「時間の庭」をもっています。

出会いを大切にすると，「時間の庭」に一つの花が咲きます。

今日はどんな花がさきましたか？

でも，その花は色鮮やかで，お花屋さんに並ぶような花ばかりではありません。心を寄せないと見えないような，かすかな花かもしれません。また，鮮やかな花を目立たせるようにじっと咲いている苔のようなものかもしれません。でも，そっと咲いている花に寄せる感性こそ，「時間の庭」を充実させる豊かさなのです。

レイチェル・カーソン[1]の「センス・オブ・ワンダー」では「知ることは感じることの半分も重要ではない」としています。知識や知恵の種を育む土壌が「感性」なのです。

感性とは，小さきもの，弱きもの，はかないもの，うつろうものへ，そっと心を寄せ，感じることです。子どもは，小さな生きものにも，自分と同じように，心を寄せることができます。そして，その基準はいつも自分の中にあります。[2]

大人になると，見えなくなるときがあります。ですから，子どもを育てながら，再び，子どもの感性に出会って，心が洗われるのです。子どもとは，人の心を映し出す鏡のような存在なのです。

あなたの子どものころに咲いていた「時間の庭」の花は，今も枯れずに同じように咲いていますか。

1）レイチェル・カーソン，上遠恵子訳 『センス・オブ・ワンダー』新潮社 1996
2）ターシャ・テューダー 『思うとおりに歩めばいいのよ』 2002
＊）ペニシア・スタンレー・スミス 『ペニシアの四季の詩（うた）』 2014

5 大人になって

小さな娘が思ったこと

小さな娘が思ったこと
ひとの奥さんの肩はなぜあんなに
匂うのだろう
木犀(もくせい)みたいに
くちなしみたいに
ひとの奥さんの肩にかかる
あの淡い靄(もや)のようなものは
なんだろう？
小さな娘は自分もそれを欲しいと
思った
どんなきれいな娘にもない
とても素敵な或るなにか……

小さな娘がおとなになって
妻になって母になって
ある日不意に気づいてしまう
ひとの奥さんの肩にふりつもる
あのやさしいものは
日々
ひとを愛してゆくための
　　ただの疲労であったと

茨木のり子
『見えない配達夫』
飯塚書店　1958

大人になって気づくこと

子どものころは，大人を人格者だと思い，年を重ねると「偉くなれる」と勘違いをしていました。

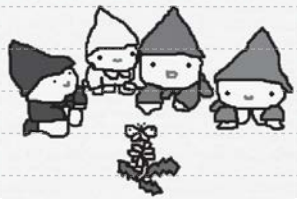
自分が大人になって気付いたことの一つは，「ずるい自分」がいることでした。「面倒だからしないようにしよう」「楽(らく)しよう」「忙しくてできなかったから仕方ない」と考えたり，言い訳したりする自分です。

夏目漱石の小説「草枕」の冒頭にある「山路(やまみち)を登りながら，こう考えた。智(ち)に働けば角(かど)が立つ。情に棹(さお)させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかく人の世は住みにくい。」[1] のように，思った通りにはいかないのが世の中です。

すぐに「なんで自分だけ」「どうせやっても無駄」などというとき，自分の考えを通そうと屁理屈をいうとき，理不尽な意地をはって周囲に無理を強いるとき，自分の感情を他人にぶつけて意気がるときなど，人格者からほど遠い自分がいます。途方に暮れ反省しながらの日々が過ぎるときもあります。

仕事もじっくり取り組むのではなく，こなすだけの毎日では，自分を高めることもできず，溜息ばかりが多くなります。

こんな大人は，子どもたちの目に，どのように映っているのでしょう。



1）夏目漱石 『草枕』春陽堂　1907

6 待つ時間

待つ時間の意味

絵本「ふたりはともだち」[1]の「おてがみ」の中には，私たちにとって忘れてはならない大切なものがあります。「かえるくん」は，一度も手紙をもらったことのない「がまくん」に書いた手紙の配達をかたつむりに頼みます。「がまくんとかえるくん」は並んで，４日もかたつむりを家の前で待ちます。

情報が瞬時に行きかう時代でも「待つ」という行為は同じです。「待つ」には期待が込められています。「春を待つ」「帰りを待つ」などです。

「待つ」ことの中に期待と希望があふれているのです。

がまくんとかえるくんにとって，ゆっくりと歩むかたつむりをいっしょに待つ時間こそが大切だったのです。

子育ても「待つ時間」なのかもしれません。口を出さない，手を出さない，目をかけるという子育てはなかなか容易ではありません。現代のように競争社会では子どもを「待つ」ことができず，子どもを追いたて，挙句の果ては親が代行してしまいます。見守ること，待つことは，手や口を出すより，はるかに難しいことですが，とても大事なことです。

大切なのは，子どもといっしょに「今」を共有することです。

私たちにあるのは「今」だけです。未来も過去もありません。今の積み重ねが過去となり，記憶として，自分の体内に残っていきます。未来は「今」の連なりの先にあるだけです。日々の何気ない時間が自分をつくっているのです。

1）アーノルド・ロベール著・三木卓訳　『ふたりはともだち』文化出版局　1987
＊）鷲田清一　『「待つ」ということ』角川選書　2006

7 子どもの安心圏内

内から見る子ども

緊張の連続から抜け出て自分の時間や空間に入ったとき，身も心もほっとした状態になるときがあります。

６月頃のある日の休み時間，絵を書いていた１年生が，私（先生）のことを「ママ。……！」と呼んで，そのあと照れくさそうにはにかみました。

その子の安心圏内に，一瞬，私が入ったときの出来事でした。緊張が続いた入学期のころから，少し慣れ始めて「自分を教室の中に置くこと」ができたときでもあったのです。

誰にでも，自分の安心圏が必要です。安心圏がつくれず，日々の生活が緊張の中にあるとしたら，豊かな心が育つわけはありません。

戦火や自然災害に追われる状況下では，安定した心の安心圏など得ることもできません。温かな家族の中で育まれる「安心」は，どのような状況に置かれても強い支えになります。

学校でも先生が何より大切にしているのが「心の居場所」です。家庭に「心の居場所」がある子どもは学習や友人関係から大きくはみ出ることはありません。やはり基盤は「家庭」です。

学習用具の準備や持ち物の一つ一つにていねいに書かれた名前など，子どもの所作から「家庭」の姿が浮かんできます。

でも，時折，朝ごはんを食べずに登校したり，夜遅くまで親と一緒にゲームをしていたりするのを聞くと，子どもの心の向こうに「家族」が見出せないことがあります。

8 何のために生きるのか

『アンパンマンのマーチ』

作詞　やなせたかし　作曲　三木たかし

そうだ　うれしいんだ
生きる　よろこび
たとえ　胸の傷がいたんでも

なんのために　生まれて
なにをして　生きるのか
こたえられないなんて
そんなのは　いやだ！
今を生きる　ことで
熱い　こころ　燃える
だから　君は　いくんだ
ほほえんで

そうだ　うれしいんだ
生きる　よろこび
たとえ　胸の傷がいたんでも
ああ　アンパンマン
やさしい　君は
いけ！　みんなの夢　まもるため

なにが君の　しあわせ
なにをして　よろこぶ
わからないまま　おわる
そんなのは　いやだ！
忘れないで　夢を
こぼさないで　涙
だから　君は　とぶんだ
どこまでも

そうだ　おそれないで
みんなのために
愛と　勇気だけが　ともだちさ
ああ　アンパンマン
やさしい　君は
いけ！　みんなの夢　まもるため

時は　はやく　すぎる
光る　星は　消える
だから　君は　いくんだ
ほほえんで

そうだ　うれしいんだ
生きる　よろこび
たとえ　どんな敵が　あいてでも
ああ　アンパンマン
やさしい　君は
いけ！　みんなの夢　まもるため

JASRAC　出　1604545-601

生かされているわたしたち

やなせたかしが作詞した「アンパンマンのマーチ」には「何のために生まれて何をして生きるのか　答えられないなんて　そんなのは嫌だ！」という歌詞があります。

この歌詞は，特攻隊員として若い命を戦争で失った，やなせの弟のことを思う心の叫びでもあるそうです。

私たちは，この世に授けられた命をあの世に返しにいく時間を生きているのです。

私たちは，生きているのではなく，生かされています。生かされているとしたら，何のために，この世で生きているのでしょうか。

アンパンマンのマーチは，子どもたち誰もが「嬉しい」といえる「生きる喜び」を感じるような世界を，それぞれの与えられた場で，それぞれの力でつくりあげることを訴えています。

その重要な位置にあるのが，「子育て」です。それは，自分の子どもに限らず，どの子どもに対してでもです。今，誰もが「子育て」をしているのです。

子どもは未来を築きます。この子どもに大人として親として，何ができるかと考えると，難しそうに思えますが，親が精いっぱい自分の人生を生きている姿を見せてあげることです。子どもは，その姿を見て「育つ」のです。子育ては，「育てる」のではありません，「育つ」のです。まずは「人並み」にすることです。その上に個性や才能が発揮されるのです。子どもに「早く早く」とせかせる親のあせりは，子どもの人生をゆがめてしまいます。人並みに，人として生きることが大切なのです。アンパンマンのいう「生きる喜び」を親も子どもも，分かち合えたらいいですね。

＊）やなせたかし　『人間なんておかしいね』たちばな出版　2002
＊）「20 世紀の遺伝子」本制作委員会　『あなたを劇的に変える言葉』フジテレビ出版　2003

9 発達すること　学ぶこと

学ぶということ

子どもが成長するとか発達するというのはどういうことでしょう。

何か教えられたり，学習したりしてできるようになることと区別して，発達心理学では，なぜか「できるようになっている」事態を指しています。その学んだことは「暗黙知」[1]や「身体知」とよばれ自分の体に内在しているのです。

なぜできるようになっているかの諸説はありますが，現在主流になっているのは，さまざまな能力が相互に関係し合って構成される「構造」が整い，自ら対象に働きかけ，そして，その対象から働きを受けるような社会的な相互交渉によってネットワーク化され，一気に能力が高まり身に付くという考え方です。[2]

ですから，私たちが学習するとか学ぶというのは，文化や社会の中に埋め込まれていて，人と人，人や社会との交わりなどから影響を受けながら発達しているというのです。

幼稚園や保育所の砂場や園庭で繰り広げられる子どもにとっての「遊び」は，「学び」の場なのです。

そこで大きな力になるのが「共感」[3]です。他者の考えを類推したり，他者の立場で考え行動したりすることで，一層磨かれるのです。他者とともに生きるための知恵としての能力が培われ，社会的関係の中で「よりよく生きる」ための知性が発達するのです。

人間は「学ぶ」動物です。学びを放棄したとき，人間は人間でなくなってしまいます。その学びの原点はあかちゃんにあります。

1）中村雄二郎　『臨床の知とは何か』岩波新書　1992
2）佐伯胖　『幼児教育へのいざない　円熟した保育者になるために』ＵＰ選書 280　東京大学出版　2001
3）佐伯胖　『共感　育ち合う保育のなかで』ミネルヴァ書房　2007　＊）佐々木毅　『学ぶとはどういうことか』講談社　2012

育てるということ

子どもの詩

おかあさん

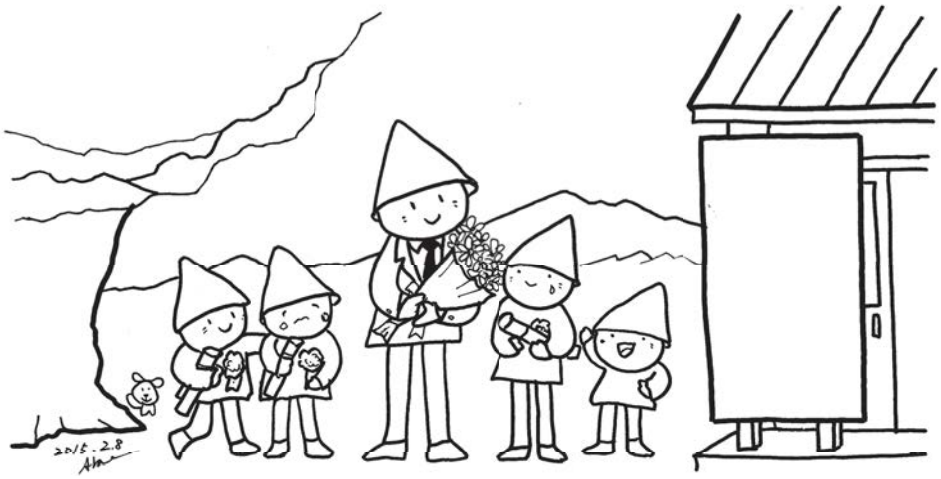
佐藤　明良（大分・小二）

ぼくは　ははの日
白つめ草という
クローバーの　花を　とって
おうちで　くびかざりを
おかあさんに
作って　あげた。

おかあさんは
しばらく　下を　むいて
「ありがとう。」といって
くびかざりを　かぶった。

よる「おやすみなさい。」をいいにいくと
おかあさんは
くびかざりを
まだ　かけていた。

吉野弘・新川和江監修『おかあさん、あのね　こどもがかいたおかあさんの詩1』大和書房　1991



10 たかが子ども　されど子ども

髪を染めるのは自由！？

子どもは大人の真似をしたがります。

子どもの髪の毛を染めるのは，自由な現代ファッションの一つでしょうか。「目立つから」「子どものうちからおしゃれに」「子どもが茶髪にしてみたいというから」という自己主張や個性を表明するためにするのでしょうか。

大人と子どもの違いは，子どもは大人になる前の存在であるということです。体も心も発展途上の子どもです。お酒やたばこを禁じるのと同様に，頭皮に染み込んだ薬品が，将来大人になったとき，どのような健康上の影響を及ぼすか分かっていません。

子どもが酒を飲みたい・煙草を吸いたいと言ってきたときに，どう答えるかは「親」の責任です。髪を染めることも同じと考えることには無理があるでしょうか？成長する子どもの健康に責任をもつのは親の大切な役割なのです。

自由には「責任」が伴います。人とともに生活する社会の中で，自分にかかわる自由は認められるかもしれませんが，自分の子どもといえども，その人格や健康まで，侵害する権利はありません。

子どもが自分で判断して選択できるようになるまで，親自身がきちんとした選択基準をつくり実行することが大切です。あふれる欲望から一つを選べるようになるまで，親が規範を示さねばなりません。親の「がまん」する姿は，子どもにも伝わります。親が何でも好き勝手にやっていたら「示し（しめし）」がつかないのです。

子どもは親の所有物ではありません。体も心も健康に生きることを保障すべき「命」なのです。

11 子どもをたたいてはいけません

親のすることは「まねる」

ここに相田みつをの詩があります。

アノネ
親は子供を
みているつもりだ
けれど
子供はその親を
みているんだな
親よりも
きれいな
よごれない
眼でね

＊）相田みつを（『しあわせはいつも』所収）

子どもは，生きるために学ばなくてはなりません。食事をすること，眠ること，ウンチやおしっこをすることなどなど，その仕方の多くは親から学びます。親の気にいらないことがあるたびに，「怒鳴(どな)る」，「たたく」などを続けていると，今度は親の見えないところで，子どもにも同じ行動が現れます。たとえば，幼稚園や保育所そして学校で，友だちを平気でたたいたりすることになるのです。先生は，家庭での親の叱り方などわからないことが多いので「どうして，友だちをたたくの？！」と叱っても，叱っても，その行為は繰り返されます。また，家庭でたたかれて育った子どもは，友だちをたたくという行為に及ぶばかりではありません。常態的にたたかれることで「無気力」になり，自己肯定感を失い，「自分はたたかれてもしかたのない悪い子ども」だと，自分を責めるようになります。養育環境や人間環境によって，悪くもよくもなります。親として，どんな存在であるべきか，「子どもの目」を通して自分を省みることから，子育ては始まります。スタートラインは，いつも目の前にあります。育てたように子どもは育つのです。

＊）相田みつを　『しあわせはいつも』文化出版局　1995
＊）佐々木正美著　相田みつを書　『育てたように子どもは育つ』小学館　1999

12 どこで学ぶ　誰が教える？

どこで学ぶ？

ある小学校の養護教諭から聞いた話です。

「先生！トイレにトイレットペーパーがありません！」というので，予備のペーパーを抱えて，１年生のいうトイレに走って行きました。でも，トイレのペーパーホルダーには何か所も備え付けの紙はあるのです。首をかしげていると「違うよ！こっち！」と１年生のその子の示したトイレは……。そうです，それは洋式トイレのところであって，和式トイレは，ほとんど使われていないのです。

さて，どう考えますか？

「学校のトイレをすべて洋式にすべきだ」「和式のトイレの使い方を教えるべきだ」など，いろいろな意見が出てきそうです。

我が国の家庭のトイレは，清潔な洋式のトイレがほとんどで，便座も温かくシャワーまで付いています。

子どもは和式のトイレに接する機会が全くといっていいほどなくなりました。災害時など，おしっこがしたい，ウンチがしたいとき，和式タイプしかないことを想定して使えるように，教えますか？練習させますか？

日本のトイレ環境は世界一衛生的だとも言われています。水の国ともいわれる我が国では，上・下水道も当たり前のように備わっています。街中の公共のトイレも無料で使えます。便利になりすぎて見えなくなっていることがあるのかもしれません。でも世界では，9.5億人が野外で排泄したり，５歳未満の子どもが不衛生なトイレに起因する下痢性疾患で１日に1000人が亡くなったりしています（世界保健機構調べ）。それぞれの国の文化や歴史があったとしても，トイレから考えさせられることは多いものです。

＊）朝日新聞グローブ 2015．9.6　No166「トイレから愛をこめて」

13 子どもをよりよく育てたいのなら

◆大人が子どもを育てる

大人にも大人の事情があるように「子どもにも子どもの事情」があります。子どもの世界に親や大人が過度に入り過ぎると，子ども同士の関係がギクシャクします。

そのひとつに「先生の悪口を子どもの前で平気で言う」ことが挙げられます。たとえ先生に「非」がある場合も，子どもの前で言ってはいけません。先生と親は大人同士です。

先生を弁護しているのではありません。親から聞く先生の悪口によって，子どもの先生に対する見方や感じ方が変わります。それも否定的な見方に変わるのです。先生に対する信頼度が低下すると授業の理解や学習意欲も失っていきます。

同じように親のぐちの相手を子どもに求めてはなりません。家庭は子どものストレスを解消するところです。家庭が夫婦で支えるべきものである以上，大人同士で解決すべきものです。

先生にも親にも，大人の対応が求められます。大人のいざこざに子どもを巻き込んでは絶対にいけません。子どもには「子どもの世界」があり，大人には「大人の世界」があることをしっかり認識することです。

子どもが，子どもを育てることはできません。大人が子どもを育てるのです。「大人」としての節度や良識があって，子どもを育てることができるのです。

「学校」と「家庭」の違いを呼吸にたとえた話があります。子どもは，「学校」でたくさんの知識や技能を吸い込んできます。「家庭」は，息をはくところです。子どもの成長は，吸うことと，はくことで心豊かに育つのです。

今の日本の子どもには，真に息をはくところがあるのでしょうか。

14 ガミガミ・クドクド・ネチネチ

◆ガミガミ・クドクド・ネチネチ

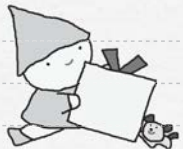
「なんで！」に続く言葉には，いろいろあります。ここでの「なんで！」は「なぜ？」「どうして？」という，予測したことが異なった結果になった時に思わずでる疑問の言葉ではありません。

「なんで！こんなのもできないの！」「なんで！こんなことしたの？！」と怒るときの前置きの言葉です。

子どもの側に「なんで！？」と言われる原因や責任があるのかもしれません。でも，常套句になるのは，子どもを責める対象や感情のはけ口として，子どもを怒るときに出るように思います。「叱る」と「怒る」は違います。感情的に怒っては，届かないことが多いのです。「なんで（なぜ）」を「何」に換えると責める感じがなくなります。「何に一番気を付けるといいと思う？」「もう一度言いなおすとしたら，何て言うといいかな？」など自分で考え，行動に移す可能性をもたせてあげることです。

また，叱り方でも「ガミガミ・クドクド・ネチネチ・ナガナガ」が続くと，子どもは自分の存在を価値ある人と感じ取れずに，自己肯定感（自尊感情）を育むことができません。

ほめる声は子どもの知能を高め，怒鳴（どな）る声は子どもの攻撃心をあおります。その積み重ねが，子どもの心に残るのです。まずは，あなた自身の自己肯定感を育みましょう。心の蓄えをもつのです。そうしたら，親も子どもも，自己肯定感に包まれた人になることでしょう。



＊）東ちひろ　『ほめ方・しかり方の極意』明治図書　2012
＊）鷲田清一　『普通をだれも教えてくれない』潮出版　1998
＊）佐々木正美・松本ぷりっつ　『子育てサプリ』主婦の友社　2012

15 過保護と過干渉

「怒らないから」と言いつつも

大人が子どもを叱るときに，「怒らないから言ってごらん」といっても，子どもがその言葉を信じるかどうかです。大人の都合だけで，子どもに接すると，子どもは大人の嘘を見破ります。言葉にならないことでも，仕草や表情に表れているからです。

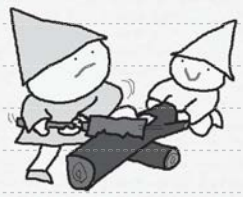
子どもが成長するのに最も大切なことは「自分は愛されているんだ」「大切に思われているんだ」という自己肯定感・安心感です。

子どもの様子が少しおかしいなと感じたら，「あなたのことを大切に思っているよ」という気持ちでそばにいるだけでいいのです。だまって抱きしめてあげることです。

「過保護」はいいが，「過干渉」であってはいけないといいます。子どもが，望む願いにきめ細やかに応える「過保護の親バカ」は大いに結構ですが，子どもが望まず，自身で乗り越えなければならないことまで，先回りして親が手を出すのは「過干渉のバカ親」です。

やがて戻る場所のある「放任」は，「行ってきます」と旅にでるようなものですが，「放置」は戻る場所もなく，さまよう逃避行です。家庭が「おかえり」といえる心の居場所になっているかどうかです。

親を信頼することができると，子どもは人のことも信頼できるようになるのです。



＊）佐々木正美 『抱きしめようわが子のぜんぶ』大和出版 2006

16 大人の基本的生活習慣と子ども

あなたは大人？それとも

大人と子どもの違いを「責任」から考えてみましょう。大人は「自分の言うこと・言ったこと」「これからしようとすること・したこと」に責任をとることができます。責任をとれないようなことは「できないことを約束しない」など，失敗しても自力で解決できるのが「大人」です。

子どもに「～しなさい」とか，「子どものくせに」とたしなめるときにも，大人としての規範が，子どもから見えているでしょうか。

子どもの基本的生活習慣を論ずる前に大人の生活習慣が守られているかどうかが問題です。子どもは「見て」学ぶのです。子どもを育てる大人に必要なのは，大人自らの生活習慣を確立することです。

これが「示し」です。子どもは規範を大人の行動から学ぶのです。

「しつけ（躾）」とは，親が子どもの立場を尊重しながら，子どもが身に付けるべきことを経験的に学ばせることです。

私たち大人は「身に付ける」ために，「失敗する」ことがこれまでに保障されていたといえるでしょう。経験には失敗が付きものです。

「失敗する」ことを親や先生が，先回りして取り除いていては，「自立」の芽を踏みつぶしてしまいます。失敗してもいいように大人として責任のある態度や支援を考えておくことが大切なのです。

失敗しない方法を学ぶのか，失敗を恐れず，失敗しても起き上がる方法を学ぶのかです。

17 してほしいことを伝える

「だめ」「しなさい」

現代の子育ては，禁止や命令があまりにも多くなり過ぎました。

「だめ！やめなさい！いけません！」とついつい口にしてしまいます。

否定的なことばかり言われてしまうと子どもはやる気を失っていきます。

親として「こうしてほしくない」というときには，「してほしいこと」を肯定的に伝えることが大切です。*)

「ゲームはやめなさい。晩御飯ですよ」という代わりに「あと20分で晩御飯ですよ」というように，親が期待していることや見通しを子どもにもたせることが大切です。親は子どもを急かせず見守ることで，子どもに忍耐や根気を育てることができます。

干渉・指示型の親は，子どもが困らないように，先回りして，指示したり，準備したりします。子どもは依存的になり，自立できず，うまくいかないときは，親のせいにします。

補助・支援型の親は，子どもの力で行動させ結果には親が責任をもちます。そうすると，子どもは失敗を受け入れ，安心して自分の力で行動することを身に付けていくのです。

私たち親が直ぐに癇癪を起こしていたら，周囲の人とうまく生活することはできません。社会で生きるために，親自身が待つこと，順番を守ることで，子どもは身の回りから確実に学ぶのです。

「育てる」という言葉には「成長させる，教え導く」という意味があります。他には「おだてる，のせる」という意味もあります。日本古来から「おだてる」文化が大切にされてきたのです。

*）ドロシー・ロー・ノルト著　吉田利子訳　『いちばん大切なこと』PHP 研究所　2005
*）安藤鉄夫　『新しい親・新しい子』楡書房　1969
*）トーマス・ゴードン著・近藤 千恵訳　『親業』大和書房　1998

18 子どもは「作品」？！

自分で自分をつくる

ある親御さんから「子どもは私たちの作品です。いい教育を受けさせたい」と言われました。「早めにいいことばかりを与えたい」と願っての親心から出た言葉だったのでしょうが，果たしてそうでしょうか。子ども時代に，親の力で，子どもが自分の力で解決しなければならないことまで，手出し口出しすると，子どもは何を考え行動するようになるのでしょうか。

子どもが，自分の力で自分をつくりあげるならば，親の役割は，「親」の字のごとく「親：木の上に立って見る」程度の距離を置くことです。子どもが安心して活動できて，何かあったら対応できる距離のことです。「親：土の上に立って見る」過干渉でも行けません。また放置するような「親：山の上に立って見る」遠い存在でも子どもは安心して自分を表現しません。子どもを見ているという監視する見方ではなく，子どもが見えている距離に身を置くことが大切なのです。

親子関係の問題のほとんどは親の側にあります。「あなたの子は，あなたの子ではありません。自らを保つこと，それが生命の願望。そこから生まれた息子や娘，それがあなたの子なのです。あなたを通ってやって来ますが，あなたからではなく，あなたと一緒にいますが，それでいてあなたのものではないのです。子供に愛を注ぐがよい。でも考えは別です。子供には子供の考えがあるからです。」[1] 子どもは，あなたの所有物ではありません。

「うまい子育て法」などありません。親としてできることは，子どもに健康な体と常識と自立心を育てることです。

1）カリール・ジブラン著　佐久間　彪訳　『預言者』至光社　1990

19 子どもは感じたことから学ぶ

しつけの違い

しつけの基本はまず「自分の子どもを信じる」ことから始まります。

そして，集団の中で生きるために，「他人を傷つけない」「他人のものを取らない」「他人の心を傷つけない」ということを，失敗しながらも，自ら身に付けていく過程を温かく見守る親であることが大切です。そうすると柔らかい心が芽生えてきます。柔らかい心は「包み込む心」からしか生まれません。

祖父母のころの母親のしつけは「体」で，今は「口」で，といわれます。

たとえば，起床のときも，以前は「朝は台所から響く包丁の音や，みそ汁の匂いで起きる」，今は「起きなさい！」という言葉で起きるなどのようなことです。

でも，起こされるのが「親」だとしたらこれは大変ですが，就業の形が劇的に変化し，親も深夜からの仕事などに就いて，生活の基盤をつくるのに精いっぱいという家庭もあります。「親」という業を背負い，自身の人生を生きることしか，考えが及ばないというのであれば，他力に頼りながらも自立の道を目指さなければなりません。

良寛和尚の言葉といわれている「俺が俺がの<我>を捨てて，おかげおかげの<下>で生きよ」の中には，「自分が」「自分だけが」と独りよがりにならず，他の人の力を借り感謝しながら成長することの大切さが説かれています。子育てに完璧などありません。子どもを取り巻くすべての人が「親」になるのです。子どもは，よりよく友だちにも育てられています。ですから，自分の子どもを育てようとするのであれば，自分の子どもを取り巻く，友だちもいっしょに育てることも大切です。

20 「しなさい」と「しようね」

言葉は理性

街角でも，公共の乗り物でも，親が子どもをしかる場面に遭遇することがあります。眉間に皺を寄せて，若い母親がまるでやくざ映画のように「てめえ，今度やったら承知しないからな！」と罵声をあげることに驚き，子どもの内面を思うばかりです。「言葉は理性」です。

勧誘と命令

カナダの小説家モンゴメリーの「赤毛のアン」の物語を訳した村岡花子[1]は「命令」と「勧誘」のしつけについて書いています。「手を洗いなさい」と「手を洗いましょうね」の違いです。

そこにどんな違いを発見しますか。

「考える」時間と機会が与えられているかどうかです。「手を洗いなさい」というような「命令」には，「考える」ことは許されません。いかに行動に移すかが鍵になります。しかし，「手を洗いましょうね」というような勧誘や誘いには，過程を考える時間が保障されています。その上で，自分で見通しをもち行動に移すという違いがあります。

子どものことを考えてと言いつつ，大人の都合や価値観を押し付けると，躾（しつけ）は「押（お）し付（つ）け」になります。子どもが自分で考えるところを強制や命令によって動かすことになるのです。

また，「洗いましょうね」には，言葉のもつよさがあります。言葉は「思考」の結果に表れるものですから，思考過程で言葉を選ぶなどの論理的な過程を踏むことになります。言葉にはイメージを触発する力があります。

人間は動物ですが，言葉をもってはじめて人間なのです。

1）村岡花子 『女性の生甲斐』牧書店 1953
＊）津守眞 『保育の現在 学びの友と語る』萌文書林 2013

21 間のない話　間抜けの話

3間のない子ども

時間・仲間・空間の３つの「間」が子どもたちからどんどん失われています。自分の時間がもてず，人と人とのかかわりが減って仲間をつくる機会がなくなっています。そして，子どもが育つ外遊びをする空間が身の回りから消えています。そんな中で親にできることはテマ（手間）はかけるがジャマ（邪魔）をしないことです。

この手間は代償など求めるものではありません。惜しまず，愛おしむための手間です。やがてそれらは子どもの力となります。愛されて育てられた子どもは人を信じ，同じように人を愛するようになります。それを信じてひと手間，ふた手間を一つ一つ丁寧にかけていくことが大切です。

子どもの時間

子どもの時間を奪ってはいけません。子どもが学ぶのは，学校の教室だけではなく，登下校時や放課後など，いろいろあります。子どもの時間を大人が勝手にとってはいけないのです。子どもの時間をよりよくするのは「友だち」です。広く大きな空間を必要としません。友だちとの空間です。まず，自分の子どもを育てようと思ったら，周りの子どもも一緒に育てることです。

自分の子どもにはどんな友だちがいて，どんな付き合いをしているのか，一緒に友だちを育て，友だちからの影響が最終的に自分の子どもに，どう戻ってくるのかぐらいの，少し長い目でみることが大切です。

22 「せっかく」「こんなに」「のに」

◆他人転嫁はどこにむかう

「せっかく～したのに」「あんなに～したのに」は，期待していたことが実現しなかったとき，つい口からでる他人転嫁に向かう言葉です。このあとは「こうなったのは△△のせい」と自分に向かわず相手に向かいます。悪いのは相手であって自分ではないと，非難が続くのです。自分はどこかに置き忘れてしまいます。

相田みつをの次のような詩があります。

> あんなにして
> やったのに
> 『のに』がつくと
> ぐちが出る　　＊）相田みつを（『生きていてよかった』所収）

どうでしょう。悔しさいっぱいでしょうが，これがあなたの癖になっているとしたら，周りの人はどんどん離れてしまうのではありませんか。

まず，あなたの思いや努力は，相手に届いていますか。あなたは「こんなにしてやったのに」と思っていても，相手はそんなに必要なことと思っていなかったのではないでしょうか。もっと，話を聞いてほしい，感じてほしい，見ていてほしいと思っていたのではないでしょうか。

すべては「話す」ことから始まるのではなく「聞く」ことから始まるのです。

子どもと先生の関係がうまくいっている学級には信頼関係があります。「信頼」は一つ一つ積み重ねられて「信用」になります。特に，相手の悪口は，そのまま，あなたへの悪口になって戻ってくるのです。信頼は悪口からは築き上げられません。相手を肯定的にとらえ，ほめる人に「信頼」が築き上げられていきます。

自分の周りを見渡してみてください。信頼できる人はいませんか。その人の口癖はほめる言葉ですか，それとも人を貶（けな）す言葉ですか。

＊）相田みつを　『しあわせはいつも』文化出版局　1995
＊）佐々木正美著　相田みつを書　『育てたように子どもは育つ』小学館　1999

23 認めてほしい　ほめてほしい

「悪い子」はほめる

「認めてほしい，ほめてほしい」と願うのは，大人も子どもも同じです。

幼稚園や学校で，いじわるしたり，嘘をついたり，物を壊したりして「悪い子」としてレッテルを貼られた問題児と，どのように接していますか。問題児は「問題」が解消されると「普通」になります。問題が判明しないことが多いと，対応するだれもが戸惑い困惑してしまいます。

問題の所在を突き止めることも大切ですが，「悪い子」に対して，他の子どもとも同じように接することができるかどうかが大切です。偏見をもっていては，他の子どもと同じように接することはできません。「悪い子」も他の子どもと同じように，どんな些細なことでも，「認めてほしい，ほめてほしい」と強く願っているからです。

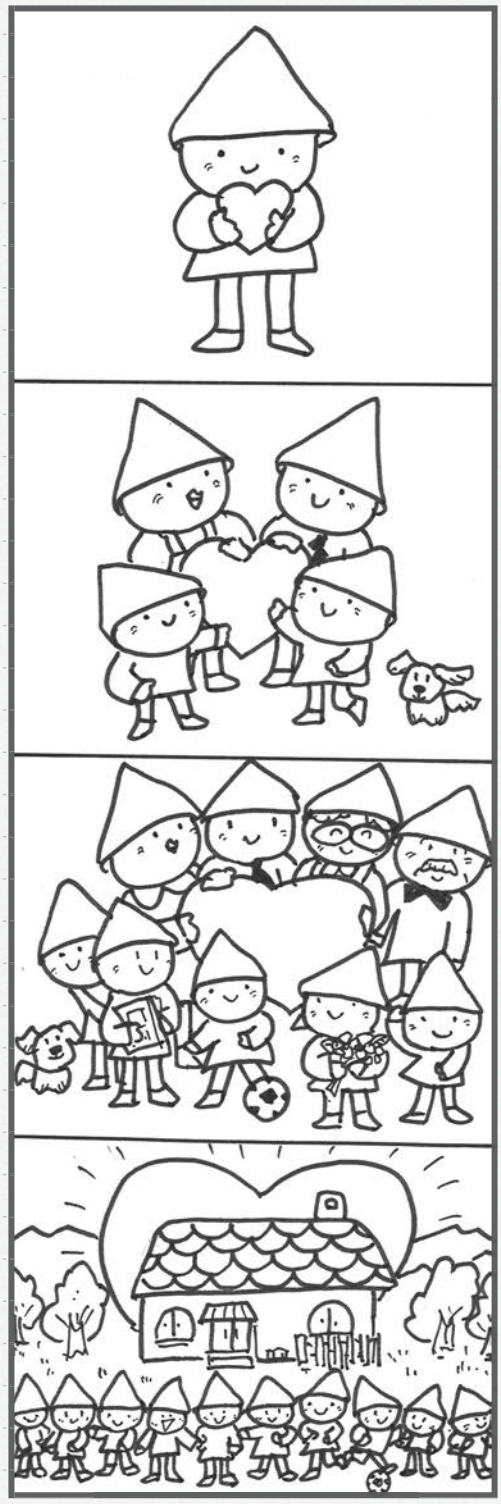
幼い子どもにやさしく接したとき，進んでかたづけをしたとき，他の子どもと同じようにほめることです。私たちは，ほめられて自信をつけていくのです。

まだ，「ほめるところがない」と思う人がいたら，目に見えたこと，ちょっとした変化を言葉にするようにします。「あいづち」と「オウム返し」で，話の糸口をつくるのです。

「いっぱい汗かいてるね。」「へえー。サッカーしてきたの」（あいづちとオウム返し）「やるねえ。カッコイイ。それでどうだったの？」というように話をつづけながら「運動すると気持ちいいよね。」と同意の気持ちを伝えるようにします。

やってみると何かが動きだします。今までとの変化をとらえると子どもへの見方が変わります。これが子ども理解のスタートです。

24 子育てに近道なし



自分で幸せをつかむ

子どもは，一人では育てられません。子どもは，さまざまな人の支えによって，よりよい生き方を学ぶのです。

その基本は，親であり，兄弟姉妹，祖父母と広がっていきます。それは，子どもが「学ぶ」順番でもあります。温かい支援があれば，子どもは，親や大人の庇護から離れて自立の道へと向かっていきます。ですから親や大人の努めは，子どもが自分の力で，自分なりの「幸せ」をつかめるように支援することです。

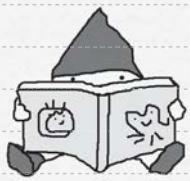
子どもは可能性の原石です。子どもを信じることです。楽しいときも，つらいときも，「家族」はいつもいっしょです。笑顔，笑い声，ハグ……，家族とともにある「安心」が強い絆になります。

あなた自身も，子育てを楽しみながら，子どもの成長に一喜一憂しながら，自らも成長することです。

自分自身を大切にできない人は，人も大切にできません。夫婦であればお互いを，親子であればお互いをというように，身近な人から少しずつ広げていくことです。

絵本作家のターシャ・テューダーは，「近道を探そうとしないこと。価値のあるよいことはみんな，時間も手間もかかるものです。」[1] といっています。

ゆっくりだけどできることを着実に進めることです。子育てに近道はありません。



1）ターシャ・テューダー著　食野雅子訳　『思うとおりに歩めばいいのよ』メディアファクトリー　2002
＊）ジュリア・キャメロン著　菅靖彦訳　『ずっとやりたかったことを，やりなさい。』サンマーク出版　2001
＊）金盛浦子　『ＥＱ　こころのポジティブ革命』ＫＫベストセラーズ　1997

ともに生きるということ

子どもの詩

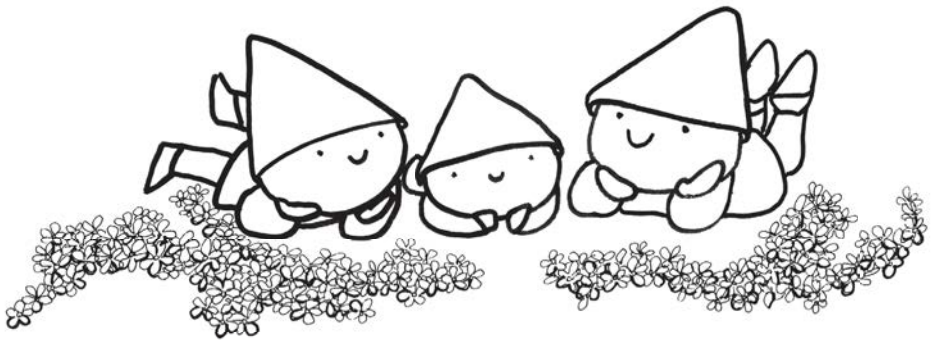
おかあさん

まつお　たく（徳島・小二）

おかあさんは、よそのひとにあったら
いつもぼくのこと
「これ、うちのたからもの。」
という。
ぼく、はずかしくなっちゃうよ。
おかあさんは、ぼくがねるとき
いつも
「こもりうた、うたってあげよか。」
という。
「いいよ。」
といっても
「まあまあ、そうえんりょしないで。」
といって、うたいながらねてしまう。

ははのひに、かあねえしょんをあげて
「ひゃくさいまでいきろよ。」
といったら、ないた。
おかあさんは、ぼくの
たからものだ。

吉野弘・新川和江監修『あかあさん、あのね　こどもがかいたおかあさんの詩1』　大和書房　1991



25 成長は「背伸び」と「ジャンプ」

自信をもちなさいというけれど

人間は大人も子どもも常に成長しつづけています。その成長を止めることはできません。

佐藤学は，「成長は＜背伸び＞と＜ジャンプ＞の連続である」[1] といいます。自分の新たな能力を獲得しようと，目標をもち，ジャンプをするのです。そのジャンプを支援するのが学校では先生であり，友だちです。失敗しても受け止めてくれるという「安心」のもとにジャンプすることができるのです。

「安心」「向上心」「好奇心」いずれも，学習の根底にある「心」です。「心」の居場所のある子どもが，自分の力（能力）を発揮しようとジャンプするのです。

今日も子どもは「自分の力」を試そうと，背伸びし新たな目標を見つけ，挑戦しようとしています。その場所が学校であり「教室」なのです。先生も親も「失敗も挑戦の証」として，温かく見守ることのできる環境をつくりあげることが大切です。

「自信をつける」ということ

自信はつけるものでしょうか。高い目標を掲げ，挑戦し，能力を身につけていくことが自信につながるといいます。これは壁を乗り越えるという考えから導き出されます。一方で，自信をつけるには，ありのままの自分をさらけ出すことだという考えもあります。

壁を乗り越える姿，自分らしさを表す姿など，考え方の違いで，いくつもの自信の姿が浮かびます。能力というものが，乾いた土に水が染み込むように体になじんでいくと考えると，人間の体には，生きている時間の分だけ「能力」が染み込んでいるのです。

1）佐藤学 『子ども学　第2号』白梅学園大学子ども学研究所　萌文書林　2014

26 おかげさま

おかげ（御蔭）とせい（所為）

「負けた時は自分の所為（せい）　勝った時はみんなの御蔭（おかげ）」

チームの勝敗を決するような対抗戦で負けたとき，失敗した原因を求めるあまり「おまえの所為（せい）で負けたんだ」と，自分より他人に目が向くことがありますが，犯人探しをしても，問題は解決しません。でも，そんな時自分はどうだったのか，自分にもっとできることはなかったかと反省する気持ちを大切にしたいものです。

反対に，勝ったときやうまくいったときは，自分の成果を強調するより，よい結果をもたらしたのは，周囲の人たちの蔭の力によるものと感謝し，謙虚に受け取ることが大切です。

「おかげさま」は，「蔭（かげ）」に隠れているような存在でありながら，自分を育て支えているたくさんの人がいることを教えてくれる言葉です。

「おかげさまで」という言葉は，「蔭（かげ）」に「御」と「様」を付けて感謝の気持ちをより高めています。「御蔭様で」というときは，ごく自然に謙虚さがにじみ出ています。

ですから，卒業などのお祝い事で「御蔭様で」というのは，日本の風土が育てた大切な言葉です。私たちは人の支えによって生きることができているのです。「おかげのおかげ」なのです。

「おかげさまで」や「ごめんなさい」が素直に，いえたなら，あなたの心は，また少し広く深くなりました。

*）上野幹夫 『ごめんなさいが言えますか』エンゼル出版　1981

27 自らを成長させようとする力

「やってみよう」と思う気持ち

「できること・できないこと」には知識や技能などの一定の能力が必要です。でも，「やる・やらない」は意志や意欲の範疇です。意志や意欲によって行動にむすびつきます。「自転車に乗りたい」という意志や意欲から練習を重ね，技能が身について，やがて自転車に乗ることができるのです。乗ることができて達成感や充実感を味わい自分を少しほめることができます。

子どもは，本来自らの内に，自らを成長させようとする力を秘めています。条件さえ整えば，その力に基づいて自己発達・自己形成を成し遂げようとするのです。[1)]

赤ちゃんのときから，話すこと，立って歩くことができるようになるのは自らを成長させる力に導かれているからです。子どもは，人生の基礎を築いています。大人は，この子どもの基礎の上に，知識，経験および技術という上部構造を築いているのです。

子どものときに学んだ成長の基礎は，端に言葉の獲得や手先の技能だけではありません。その基礎は，人間性とか道徳心とか，情操などのありとあらゆるもので成り立っているのです。

私たち大人は，子どものときの成長の基礎の上に立っています。でも，大人になると，言い訳だけがうまくなったり，「できなかった，やれなかった」とか，「やらなかった自分」がいるのに嘘をついて誤魔化したりしています。

「やろう」と思ったことが「できなかった」とき，「やらなかったのか」「やれなかったのか」反省しながら日が暮れていきます。

子どもから学ばなくては……。まずやってみましょう。

1）モンテッソーリ著　林信二郎・石井仁訳　『モンテッソーリの教育　子どもの何を知るべきか　子どもの発達と可能性』あすなろ書房　1980
*）トーマス・ズデンドルフ著　寺町朋子訳　『現実を生きるサル　空想を語るヒト　人間と動物をへだてる，たった2つの違い』白揚社　2015

28 「もの」より「こと」

かけがえのない「時間」

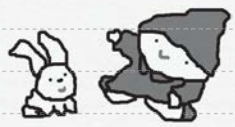
「ものは見える，ことは見えない」見えるもの，手で触れることのできるものは，具体的であり，説明できるので西洋では尊ばれています。一方，日本的と呼ばれるものには「こと」があります。今ここにある「こと」です。状況であり主観的である雰囲気も含んだものです。[1)]

芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」の古池や蛙などの「もの」一つ一つ取り上げても，この俳句の奥深さを表すことにはなりません。この俳句から広がる深遠さは，時間さえ取り込んでいるところにあります。この俳句のように，「事」を「言」にしようとするときに言葉が生まれ，人に伝えることができます。

子どもは本来「こと」が大好きです。「もの」より「こと」です。遊ぶこと，つくること，いっしょにいることなどです。大人の考える「つくるもの（作品）」ではなく，つくることそのことが好きなのです。いっしょにいることも好きです。

親が与えることのできる最上のことは，子どもと「時間」を共有することです。でもどこか遠くにいくとか，遊園地にいくことが大切なのではなく，親子で散歩する，いっしょに近所の公園で遊ぶなど，普段の何気ない「時間」を互いに共有することが，かけがえのないことなのです。そこに愛すること，信じること，日々を大切に生きることがいっぱい含まれています。

私たちにできることは，当たり前のこと，普通のことを，一つずつ心を込めて行うことなのです。



1）木村敏　『時間と自己』中公新書 674　中央公論新社　1982
＊）古東哲明　『瞬間を生きる哲学』筑摩選書　2011
＊）加藤周一　『日本文化における時間と空間』岩波書房　2007

29 あたりまえのことをていねいに

一つ一つを大切に

相田みつをの詩に「現代版禅問答」というのがあります。

> 「ほとけさまの教えとは　なんですか？」
> ゆうびん屋さんが困らないようにね
> 手紙のあて名をわかりやすく　正確に書くことだよ
> 「なんだ，そんなあたりまえのことですか」
> そうだよ　そのあたりまえのことを　こころをこめて　実行してゆくことだよ

私たちの人生は日々の出来事の積み重ねです。一つ一つを大切にすると，今まで見えなかった「もの」や「こと」が立ち上がってきます。道具の一つ一つに職人さんの心が見えてきたり，季節の行事などにも先人の心があることを学んだりすることができます。

インターネットなど情報技術が高度になり，瞬時に情報をもたらすことができたとしても，手書きの手紙をもらった時の感激にはかないません。文字の向こうに送り手の心を見ることができるからです。手紙は「送る」のではなく，思いを「贈る」のです。

「旅行」と「旅（たび）」を考えてみましょう。目的地まで直線的に無駄なく移動するのが「旅行（移動）」だとすると，「旅」は無駄も楽しみの一つとして，曲がりくねりしながら移動することです。手紙も，旅も，そして人生も，味わいながら，目的に応じて使い分けたいところです。

散歩という旅も，心を豊かにするように思います。通勤・通学の道でも，いつもとは少し違う道を歩いて駅まで行くと，道端の草花との出会いがあるかもしれません。仕事を終えて帰る家路の風景が「家族」という灯が与えられて，美しく見えることでしょう。

＊）渡辺和子　『面倒だから、しよう』幻冬舎　2013

30 愛すること

「愛する」の反対は無関心

親は何も求めない無償の愛をもって，子どもを慈しみ育てます。しかし，時には感情をぶつけたり，受け入れたり，悩み苦しみながら子どもを育てます。「愛する」こととはどのような在り様をいうのでしょうか。

憎しみは，まだ相手のことに意識が向いています。でも無関心はその対象にすらなっていない状態のことです。

「好き」と「愛する」は同じような意味に感じますが，「愛する」とは，その対象に惹かれて，その価値を認め尊敬し，なじんでいくことです。一時の感情の表れではありません。そこには冷静な判断も求められるのです。「好き」は「愛する」ことの入口にあります。

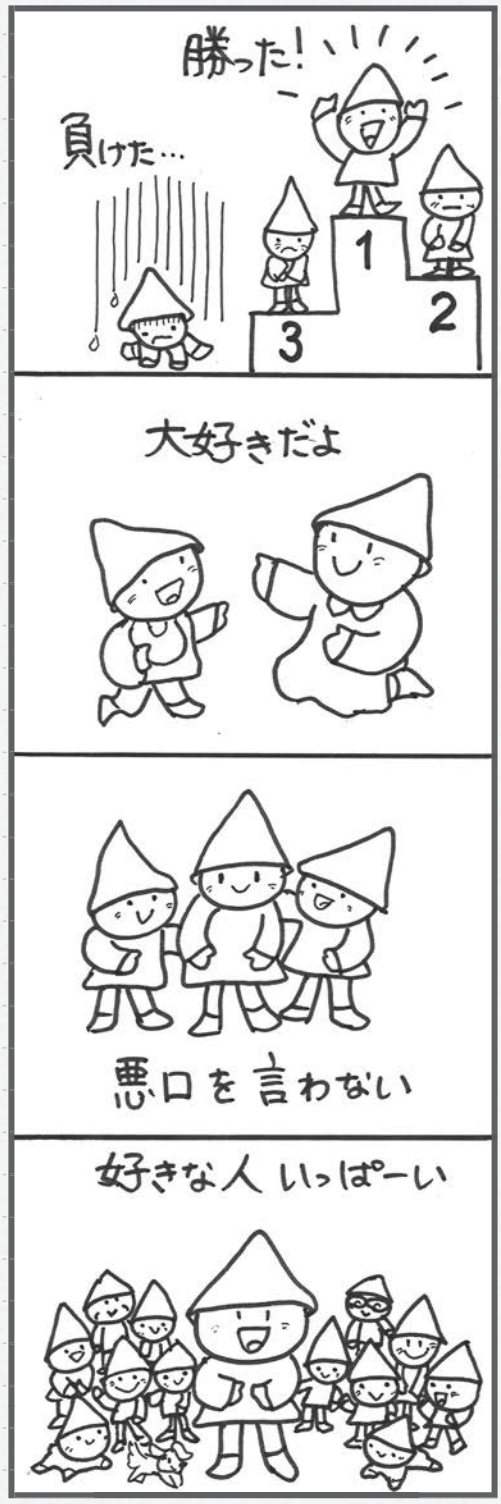
どうして，人間にはこのような感情が育つのでしょうか。赤ちゃんのとき，親に見つめられ，反応を返すと親からも反応が返ってくるという「まなざしの往還」が，親への期待とともに，「自分」という存在を意識する原点になっていると考えられます。

「期待に応える，応えると認められたという喜びになる」ことを幼少から与えられている子どもは，自分をかけがえのない存在だと感じ，自己を確立することができるのです。

関心を向けることがはじめの一歩です。興味をもつという自発的で主体的な行為から生まれます。誰もがもっている好奇心が，その行動をつくりだします。

＊）ポール・ブルーム著　春日井晶子訳　『赤ちゃんはどこまで人間なのか　心の理解の起源』ランダムハウス講談社　2006
＊）小西行郎　『赤ちゃんと脳科学』集英社新書　2003
＊）フランス・ドゥ・ヴァール著　柴田裕之訳　『道徳性の起源　ボノボが教えてくれること』紀伊國屋書店　2014

31 勝たない人生



勝ち組・負け組を超えて

人生は勝ち・負けでしょうか。書店にも「負けない人生」などの本が並びます。「競争」を強いられた人生に勝つことを求めています。人生を勝ち組・負け組など「勝ち・負け」で論じる人もいます。

果たしてそうでしょうか。「勝つとうれしい　負けるとくやしい」となりますから，負けたときは，くやしさをバネに次への動き出しができます。でも，この勝ち負けには自分の外に基準があり，他者との関係で決まることが多いようです。

では「すき・きらい」はどうでしょう。自分の内にある基準で決めることができます。

ママが好き，○○さんが好き……など，自分で決めています。でも，自分のことが好きかとなると，なかなか言い出しにくいものです。自分のことなので，きらいな自分も見え隠れするからです。

それならいっそ，好きな人をたくさんつくったほうが，楽しいし，人生はもっと幸せです。

他人の「悪口（きらいなところ）」をいうと，自分のことは，その10倍，他のところで言われていると信じて生きてきました。実に，その通りでした。相手のよさをほめて，肯定的にとらえると，自分にも，そのいくつ分かは戻ってきます。

「好きな人」をたくさんもちましょう。

32 子どもは未来

赤ん坊を拝みなさい

「赤ん坊を拝みなさい」[1] というベビーカーの経営者がいます。それは経営戦略のことではありません。目の前の赤ん坊は，私たちが死んだあと，次の世界を見ることのできる「未来人」だというのです。赤ん坊を拝むことで，感謝の気持ちをもち，温かな関係をつくることができるというのです。

これは「子どもに阿(おもね)よ」と，へつらったり，甘やかしたりしなさいといっているのではありません。子どもを大事にすることは，そのまま私たちの未来につながっているということです。

日本の子どもの幸福度は，貧困率などから先進31ヶ国中21位と低い順位に位置付いています[2]。

渡辺和子[3] は大事にしたいものについて，「人のいのちも，ものも，両手でいただきなさい」といいます。赤ん坊や卒業証書を片手で持つ人はいません。

一つ一つのものごとを，心を込めて丁寧に扱うことです。そのために，まず，子どもを理解することです。

赤ちゃんが誕生する意味を，インドの詩人タゴールは，第一次世界大戦の戦火が欧州を覆っていた時代に，人類の未来を見据えて，「どの赤ん坊も，神はまだ人間に絶望していないというメッセージをたずさえてくる」[4] といっています。

新しい命はそれ自体が未来なのです。

1）手塚治虫 「ぼくのマンガ人生」岩波新書　1997
2）ユニセフ・イノチェンティ研究所 『先進国における子どもの幸福度』 2013
3）渡辺和子 『面倒だから，しよう』幻冬舎　2013
4）タゴール著・藤原定訳 『迷える小鳥』第三文明社　1981

33 「託す」という命のバトンタッチ

長く生きることの意味

平均寿命（零歳児の寿命を予想した数値）は，近年ますます延びて男女とも80歳を超えました。

でも，今から100年ほど前はどうだったのでしょう。

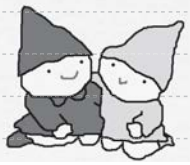
人生50年と言われた時代から，食料事情の伸展や医療の進歩，不慮の事故に対する社会システムの整備とともに平均寿命は格段に延びたと言えるでしょう。

平均寿命は各年齢の死亡率から算出されます。ですから赤ちゃんの栄養状態や医療の保護が十分でないと平均寿命も下がります。一概に現在と比較することはできません。現在と決定的に違うのは，お母さんが産み育てた子どもの数です。

20歳前後で一人目を産んで仮に５人を産んだとすると，長男・長女が成人近くなっても，末っ子は，まだ幼いことになります。親は，兄や姉に幼い弟妹を「託す」ことになります。親の生きざまを目の当たりにしている兄や姉は，親代わりとなって育てることになります。

これからの時代は，誰にどのように「託す」のでしょうか。自立には，他の人の支えが必要です。その支えとなる「人」と，ともに成長できる環境を整えるのが親の仕事になりました。

血縁関係でなくても誰もが「兄弟姉妹」になることができます。自らを育ててくれる様々な年齢層の「兄弟姉妹」をつくることです。



＊）文部科学省　「平均寿命と出産年齢及び平均出産年齢の変遷」 http://www.mext.go.jp

34 ♪歌詞に込められた思い

しゃぼん玉・赤い靴

野口雨情が作詞した童謡「しゃぼんだま」３番の歌詞には「飛ばずに消えた」とあります。そして，「風風吹くな」と連なっていきます。この歌詞には，野口自身の生まれてまもなくして亡くした子どもへの，父親として思いが込められているといいます。

同じく野口の童謡「赤い靴」にも，子どもに寄せる悲しい思いが込められています。この曲は，北海道の開拓に向かうある一家の話を聞いて，作詞されたそうです。一家は，厳寒の地での我が子の健康を案じ，幼い娘を横浜の外国人牧師に預けたといいます。娘への悲しい思いが，「異人さんに連れられて……」という歌詞と，「赤い靴」に映し出されています。

思いは詩や歌となって，人々の心に感動を届けます。

発信された目に見える現象だけでなく，その背景にあるものを感じることが，感動の深さとなって立ち現れます。発信することに重きが置かれていますが，本来は発信を受け取る側の「感性」が同時に問われているのです。

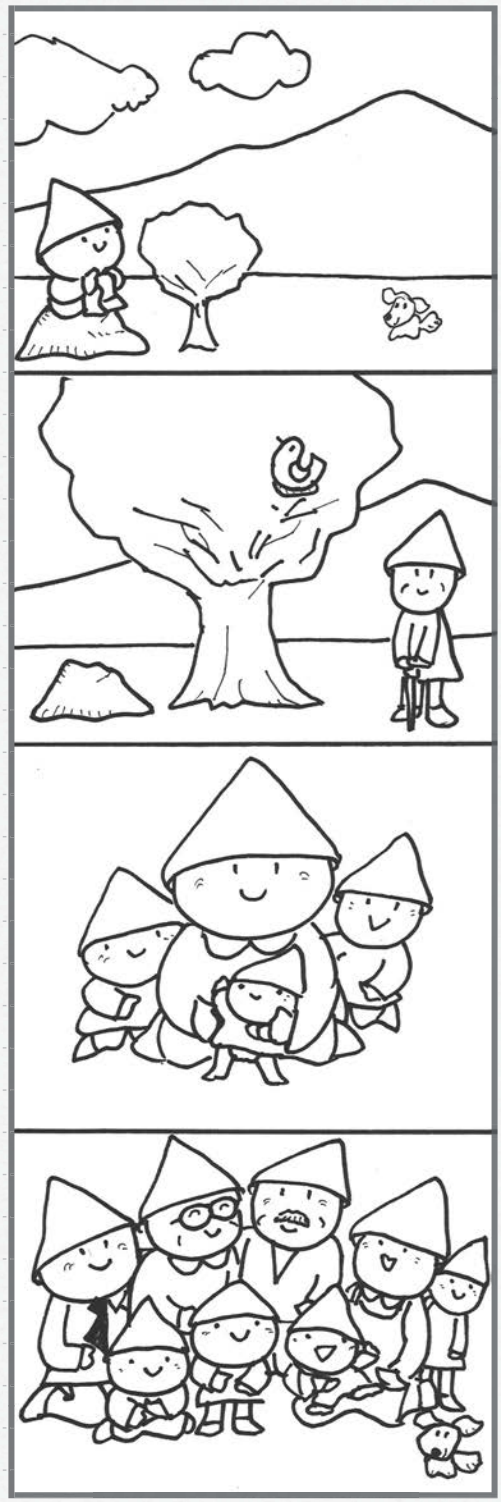
夏目漱石の小説「草枕」では，詩人や画家などの「芸術」が住みにくい世の中を心を豊かにする役割を担っているといいます。人が人を思い，感情をイメージにして伝えることができる，詩や小説，絵画などの芸術のもつ深みが，私たちの心を打つのです。

育てるべき感性は，子どもだけではありません。大人こそが感性豊かでなくてはなりません。

ほら，子どもたちの所作や驚きに心を寄せて，発見した喜びや驚きを一緒に分かち合うことから始めませんか。

＊）夏目漱石　『草枕』春陽堂　1907
＊）レイチェル・カーソン著　上遠恵子訳　『センス・オブ・ワンダー』新潮社　1996

35 変えたいことが変わらない



風景の意味するもの

いつまでも変わらないことを意味する「不易」と，新しさを求めてたえず変化する「流行」は，教育界だけでなく様々なところで使われます。

この「不易と流行」を，画家の曽宮一念は，「風景」[1)]に例えました。「景」は動くことのない山や大木などです。「風」は動き，流れる，光や，水，雲などを表しています。

世の中にも一度決定され，定着すると，時代や社会とのズレが起こっても，なかなか変わらない・変えられないものがあります。前例踏襲や従来通りなども固定化・膠着化する原因になります。

ある老舗の弁当店の社長は「変えてはいけないものほど変えやすい。変えるべきものほど変えるのが難しい」と，今も木製の弁当箱を使い続けて変えないでいるといいます。

変えてはいけないものには，いったい何があるでしょう。民主主義のもとにある「平和」や「自由」「平等」もあるでしょう。また，変えなければならないものに，貧困からの脱却や教育の機会の恒常化などがあります。人間として「普通」の生活ができるかです。

まず，守るべきものは「家族」の幸せです。この「幸せ」を不幸にしてはなりません。親が子どもを思う気持ちや子どもが親を慕う気持ちなどは未来永劫変わってはいけないものでしょう。

変えてはいけないものを，どう皆で共有し守るか，また，変えなくてはならないものを，「幸福」という尺度で，どう一人一人が行動に移すかです。

「行動」は変えることができます。できることを一歩一歩進めることです。自分で，自分の目標を立て実行することです。そして，自分を少しほめることです。その行動を，誰かが必ず見ていて認めています。

1）林健造　『アベリアの花』世界文化社　1999
＊）辻信一　『ハチドリのひとしずく いま，私にできること』光文社　2005

36 「雑育」にするもしないも

雑草と雑用

どんな気持ちで，茶碗洗いや洗濯をしていますか。

植物学の牧野富太郎が，この世に雑草という草花はないといっているのと同じように，雑用という「用」[1]はありません。

「用を雑にした時」に雑用が生まれます。「つまらない仕事」「役に立たないこと」と自分で決めて，いやいや行っているときに生まれる言葉です。ひとつひとつの「用」に対して，どれだけの心が込められるかです。同じ時間でも，その時間の使い方ひとつで，自らの心も磨かれていくのです。

子育ては「命」を扱っています。子どもは親に対して絶対の信頼のもとに，「命」を預けているのです。何ごとも，大事なものとして考え，扱うとしたら，相手も自分も大切にしていることになります。

日本の幼児教育の礎をつくった倉橋惣三[2]は，幼稚園の先生の仕事を「忠実さ」と表しました。これは「まめやかさ」と読みます。子どもの心の動きをとらえながら細やかに支援する様子を表しています。私たちの国を支えてきたのは，ひとつひとつを丁寧に忠実(まめ)忠実(まめ)しく働く勤勉さであったのです。

戦後の新教育の変化を松丸志摩三[3]は，「子どもをなぐることが少なくなったが，子どもの人権は守られているか」といい，人の子の親であるかぎり，家族一人一人の命を大切にできるかを，親や大人が反省しながら，共に歩んでいくことを訴えています。時代を経て，現代の子どもの命は守られているか，「雑育」になっていないかと問い返すことでしか改めることができません。

1）渡辺和子　『面倒だから，しよう』幻冬舎　2013
2）倉橋惣三　『育ての心』フレーベル館　1976
3）松丸志摩三　『しつけの責任はだれに』明治図書　1957

37 今　微笑んでいますか？

笑顔の背景にある家族の姿

長い教職を経て思うことは，その時その時の記憶の中にある子どもたちの笑顔です。

学級の中で日常的に挨拶をするときにも，「笑顔」の素敵な子どもたちがいました。どんなときにも，笑顔を絶やさない子どもの背景には，子どもを心から大切にしている家族の存在がありました。多くの子どもから感じられる親の愛情でしたが，家族の姿や親の姿の見えないときもありました。

「いってらっしゃい」「おかえりなさい」「いただきます」「おやすみなさい」などが，あふれる家族に訪れるのが「幸福」の姿なのでしょう。そこには，互いに寄り添う家族の姿，親子の姿や夫婦の姿，兄弟姉妹の姿，孫を温かく見守る祖父母の姿などがあります。地域の方々の姿も見えます。子どもは周りの人々の温かい関係の中で育つのです。

あいさつからはじめよう

「はい」[1] は肯定です。拒否しない，疑わない，すべてを受け入れるという無欲・無心の心から生まれる言葉です。明るく「はい！」というたびに，人は幸せになっていきます。

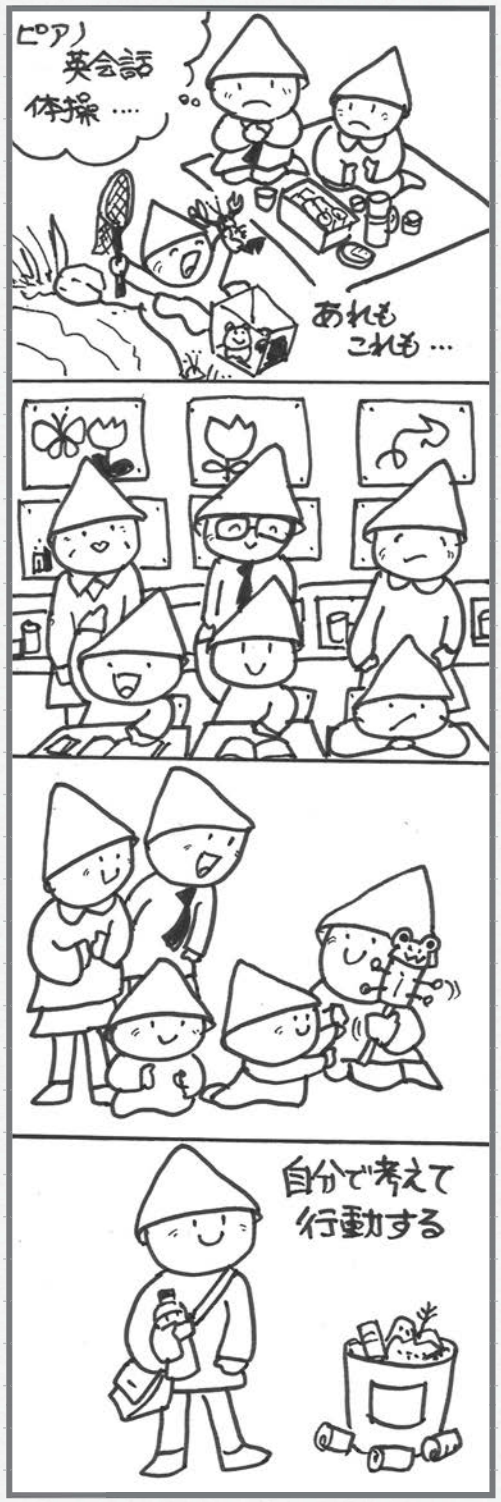
「ごめんなさい」と自分の非を認めるのは辛く恥ずかしく，腹立たしいものです。でも，心をこめて言えたなら，自分を成長させるよい機会になります。

「ありがとう」は人類が築き上げた最高の言葉です。ここには感謝と喜びがあります。

「いつも，ありがとうございます。」

1）葉　祥明　『しあわせの家族の魔法』日本標準　2007

38 本来あるべき姿を求めて



子育てに完璧はない

子育てに完璧はありません。隣を見たり，他の人と比べたりすると，色々なことが見えて羨ましく思ったり，妬ましく感じたりして，自分の子育てを否定することになります。

子育てに完璧はありませんから，完璧を求めても無理です。肩の荷を少し下ろして，自分の子どものことを見つめ直してみてください。今まで，比べて見たから，「負」と感じていたことも，例えばのんびりした性格も，「私を見ながら育ったんだもの」と考え，自分の生活を少し変えようとか，夫婦で意見の違いを認め合いながら他の人のアドバイスも受けようとか，「家族」を中心に，子育てを楽しんでください。大切なのは，「家族」の幸せを見失わないことです。

迷惑をかけないこと

子育てで「教えなくてはいけないこと」があります。「弱いものいじめをしない」「盗みをしない」などは，親がはっきりとした態度で教えなければなりません。逆にいうと，それ以外は，自分で考え行動する必要があるということになります。

子育てや「しつけ」の基本にあるのは，人に迷惑をかけないことや，人と気持ちよく接することです。

他の人に迷惑をかけず生きるには，何が必要かを考えながら，実践することです。このことは，子どもも大人も「自立」への道を歩むことにつながります。

また，人と気持ちよく接するためにはどんな受け答えが必要か考え，電話の応対や挨拶など基本的なことを，親自身が実践することです。

教育は，「人は，その本来あるべきもののごとく」[1)]を求めています。子どもがもっている人間本来の姿を見い出すことなのです。

1）ハーバート・リード著　植村鷹千代・水沢孝策訳 『芸術による教育』美術出版社　1953

39 忘れてはいけないこと

『優劣のかなたに』　大村はま

優か劣か
そんなことが話題になる、
そんなすきまのない
つきつめた姿。
持てるものを
持たせられたものを
出し切り
生かし切っている
そんな姿こそ。

優か劣か、
自分はいわゆるできる子なのか
できない子なのか、
そんなことを
教師も子どもも
しばし忘れて、
学びひたり
教えひたっている、
そんな世界を
見つめてきた。

学びひたり
教えひたる、
それは　優劣のかなた。
ほんとうに　持っているもの
授かっているものを出し切って、
打ち込んで学ぶ。
優劣を論じあい
気にしあう世界ではない、
優劣を忘れて
ひたすらな心で、ひたすらに励む。

今は、できるできないを
気にしすぎて、
持っているものが
出し切れていないのではないか。
授かっているものが
生かし切れていないのではないか。

成績をつけなければ、
合格者をきめなければ、
それはそうだとしても、
それだけの世界。
教師も子どもも
優劣のなかで
あえいでいる。

学びひたり
教えひたろう
優劣のかなたで。

苅谷夏子　『優劣のかなたに』筑摩書房　2007

やりきる　出し切る　学びひたる

国語教育の大村はまが，最期に残した詩には，私たちが大切にしなければならないことが刻まれています。

優劣や効率・成果主義など，どれも高速で走る電車の中で，ものごとの判断をしなさいといっているような現代社会です。

「時間通りに絵をかいて提出する」，一見あたりまえのように思えます。先日，ある図画工作の授業を参観したとき，その子は，時間通りの提出をためらっていました。そのことを察した先生が「まだ，かきたいの？」と聞いて，その子は「うん！」といって，先生から休み時間や放課後に時間をもらい絵の続きをかきました。後日，担当された先生から「あれから，絵をかき切って，とても満足していました。」というメールをいただきました。添付された絵には，子どもの思いや願いがいっぱい詰まっていました。

子どもが「最後までやり切った」「すべての力をだし切った」ときの表情や笑顔には，どんなものにも代えがたい成長の喜びを感じることができます。

私も，あなたも，これまでの多くの人に支えられ，今をこうして生きています。

私たちは他の人に「してあげたこと」は忘れないのですが，「してもらったこと」は案外気付かず，忘れてしまうものです。大切なことは，してあげたことは忘れても，してもらったことを忘れないことです。そうすると，感謝の気持ちで人生を生きることができます。

これまで，みなさんありがとうございます。これからも，どうぞよろしく……。

子どもの詩からみえること

子どもの詩

子どもにもどった

須藤　純子（青森・小五）

十五夜の夜に、
お母さんが、十五夜の歌を歌った。
私の知らない歌だった。
お父さんも知らなかった。
お母さんが、小さいころに、
おばあちゃんに歌ってもらった歌だそうだ
私は思った。
こんな、十五夜の月を見つめていると、
こんなにきれいなお月さまを見つめていると、
子どもにもどってしまうのだろう。
お母さんの中にいる子どもが、
歌を歌うのだ。
私も歌いだした。

子どもの詩

お母さん

喜藤　華月（仙台・小四）

この前、ないちゃった。
お母さんといっしょに、ないちゃった。
だって、お母さんにおもいきって、
がまんしてたこと、
うちあけたら、
お母さんの目に、
なみだがあふれた。
「気ずかなくて、すまなかったね。」
と言われた。
むねが、おさつけられる程、かなしかった。
だけど、わたし、
お母さんが、もっともっと、
すきになっちゃった。
お母さん、もうなかないでね。

吉野弘・新川和江監修『あかあさん、あのね
こどもがかいたおかあさんの詩1』大和書房　1991

おかあさんの詩の選者　吉野弘のことば

子どもが「おかあさん」の詩を書くと，どうしてこんなに生き生きとした詩になるのでしょう。それは多分，おかあさんが子どもの心を活性化する超高級栄養源だからです。おかあさんが笑うこと，泣くこと，子どもたちを叱ること，ほめることーその全部，そしておかあさんそのひとが子どもの感性を磨く栄養源なのです。

平和の重み

■平和への祈り

永遠平和は空虚な理念ではなく，われわれに課せられた使命である。[1)]

私たちが求めるのは，誰かの涙の上に成り立つ「幸せ」ではありません。幸せを感じることのできる人生は，誰かの犠牲の上にはありません。自由と平和の上に成り立つのが「幸せ」です。私たちは，「戦後」ということばを当たり前のように使います。これは「最後の戦争から何年経て今があるか」という意味です。今も戦火に怯えている国には，「戦後」はありません。私たちの先達の「平和」への強い思いが，この「戦後」という言葉に宿っているのです。「戦後」という言葉は，戦争を経験した人たちが，その後平和な国を願った思いなのです。

戦争で我が子を失った村岡花子（「赤毛のアン」の訳者）は「私たちは平和をあまりに感情的な，感傷的なものに扱いすぎていないだろうか。平和こそは戦いとるものである。戦争によって流された血汐は地の下，海の中から叫んで人間が戦争を放棄することを要求している。愛する者たちを失った人びとの悲しみが平和を求めている。われわれはわだつみの声を聞かなければならない。わだつみも大空も，かつて流された血汐の復讐を求めているのではなくて，そこに払われた犠牲の権利の故に，人類に平和なれと訴え，かつ要求しているのである。」[2)] と，今も私たちに平和の意味を問いかけています。「戦後」という言葉が，このあとも100年200年続くことを願ってやみません。

■忘れられない一枚の写真[3)]

戦争が終わった直後の原爆の長崎で，少年が小さな子どもを背負って直立不動の姿勢で立っているモノクロの写真があります。大きな穴を掘っただけの火葬場の穴の縁に立っています。その少年の背負った弟は死んでいるのです。やがて，小さなその遺体が炎に包まれるのをじっと見つめ，くいしばった少年の唇の端が血でにじんでいたことを写真家の言葉として伝えています。この写真を取材した新聞報道[4)] には，「神は，この一枚の写真を人間に撮らせるために，戦争を人間に与えたまえしか？神は同時に，人間に，想像力という無限の能力をも与えてくれたのです。もしも，この少年がわたしだったら，と想像してみることはおかしいか。あのとき，広島・長崎ではなく，ほかの都市が原爆投下地に選ばれていたなら，この少年ではなく，ほかの，たとえばわたしが火葬場の穴のへりに立つことになっていたかもしれない。」と伝えています。私たちは，想像することでしか，事件や事故を未然に防いだり，よりよい方向に向かって行動したりすることはできません。自分ごととしてとらえ，どこまで，想像できるかです。「人は思い出されている限り，死なないのだ。思い出とは，呼び戻すこと」[5)] なのです。

こころには　お別れがない[6)]

1）イマヌエル・カント著　池内紀訳　「永遠平和のために」集英社　2007
2）村岡花子　『女性の生甲斐』牧書店　1953
3）ジョーオダネル，ジェニファー・オルドリッチ　『トランクのなかの日本』小学館　2008
4）「写真が語る 20 世紀（目撃者）展」朝日新聞　1996.6.9
5）山田稔　『八十二歳のガールフレンド』編集工房ノア　2005
6）鶴見俊輔　『ちいさな理想』編集グループＳＵＲＥ　2010

あとがきにかえて

「ごめん」と「ありがとう」

私は，先生という仕事をしながら，「先生って，本当にいい仕事」と感じるというより，ただただ毎日目先の仕事をこなすことに精いっぱいだったように思います。

先日勤めて初めての卒業生が突然訪問してきました。40年ぶりに会う彼の話によると「自分の中で記憶がつながらないところがあるので確かめたい」ということでした。

その当時，私は学級担任の傍らサッカー少年団を立ち上げて指導をしていました。試合をすると大量失点で負けてしまうようなチームでした。彼は私の学級の教え子でもあり，サッカー少年団の一員でもありました。

彼は「先生には，『シュートされそうになったら，スライディングタックルをかけろ』と，スライディングの練習ばかりさせられました」といいます。忘れかけていた 40 年前の記憶がよみがえってきました。そういえば子どもたちは，傷だらけになりながらも，一所懸命スライディングの練習をしていました。2年後の練習試合で，PK 戦で1勝した時のことを今でもうれしくて忘れないともいってくれました。

なんとも，その無謀な指導に「ごめんな」「もっといい指導ができたら」と私は謝り，彼は，「その指導のおかげで大学までサッカーを続けることができました。本当にありがとうございました」と言いました。

私の「ごめんね」と彼の「ありがとう」が何度も繰り返されました。

最後に彼は，深々と被っていた帽子をとり「癌の治療で髪の毛が抜けました」と言い，一週間だけお医者さんから許可をもらって会いにきたことを告げました。

別れの時を迎えて，「先生より先に死んではいけない」と帰る彼の後ろ姿に告げながら，私ははじめて先生という仕事を心から誇りに思いました。

「もっともっと，よい指導を」と思いながらも「ごめんね。ごめんなぁ」と謝ってばかりで駆け抜けた人生でした。

小さくなる後ろ姿を見ながら「ありがとう」とつぶやいていました。

平成24年 4月　平成25年 4月　平成26年 5月　平成27年 4月

北海道教育大学　岩見沢校　美術教育研究室
阿部　宏行
abe.hiroyuki@i.hokkyodai.ac.jp
発行日　平成28年5月14日

1954年生まれ。北海道教育大学岩見沢校教授。
中央教育審議会初等中等教育分科会　幼児教育部会・芸術WG委員，
評価規準，評価方法等の研究開発に関する検討委員会（小学校図画工作）委員，
学習指導要領の改善等に関する調査研究（小学校図画工作）協力者などを歴任。
主著：『図画工作の指導と評価』(東洋館出版社,共著)，
『私がつくる図画工作の授業』(日本文教出版,共著)

好評発売中 新刊のご案内

演劇コミュニケーション学

演劇を活用した授業が「新しい学力」を育てる。

平田オリザ氏と蓮行氏による、演劇を活用した授業やこれからの教育を紹介した一冊。青山学院大学の苅宿俊文先生との鼎談も収録。

編著 蓮行(劇作家・演出家・劇団衛星代表・大阪大学特任講師)
平田オリザ(劇作家・演出家・劇団「青年団」主宰)

定価 **2,484**円(本体2,300円+税8%)
A5変型判　240頁　ISBN978-4-536-60083-5

森の学校・海の学校
～アクティブ・ラーニングへの第一歩～

アクティブ・ラーニングの授業がわかる待望の一冊！

森や海を題材にした全国8地域の小学校の授業を作家が取材し、ルポルタージュ形式に書き下ろした読みごたえのある内容。

編著 NPO法人 共存の森ネットワーク
監修 村川雅弘(鳴門教育大学大学院)
藤井千春(早稲田大学)

定価 **1,998**円(本体1,850円+税8%)
A5判　192頁　ISBN978-4-7830-8016-9
発行 三晃書房

書籍は、書店、ブックサービスでお求めください。
※商品のお問い合わせは、お手数ですが、裏面所在地より小社大阪本社業務部へお願い致します。

子どもが育つ　わたしが育つ
子どものABC

日文教育資料

平成28年（2016年）5月14日発行

編集・発行人　佐々木秀樹

発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33317

日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171

東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618

九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938

東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690